はじめに

歴史の流れの中でバウハウスを位置づけるために、バウハウスが誕生する背景、社会の動きなどを追って整理してみたいと思う。

＜本日の流れ＞
１．バウハウスの誕生とその背景
２．バウハウスに影響を与えた思想・人物
３．考察

１、バウハウスの誕生とその背景

■アーツ・アンド・クラフツ運動
・中世ギルド式教育
・手工芸

■ドイツ工作連盟
・「産業の芸術化」

■芸術労働評議会
・国民のための大規模住宅計画、芸術・建築教育の改革や美術館の蘇生を目標とした

■社会背景
・戦前の産業政策の反省、敗戦後のカオス的側面

２、バウハウスに影響を与えた人物

＜新造形主義～デ・ステイル＞
・機械の美学を賛美するような幾何学、直線の多様
・空間の表現法がバウハウスと異なる→デ・ステイルの方が美的原理を追求
ＥＸ・アクソノメトリー法
・芸術の本質を幾何学、水平、垂直に求める
・キュビズムのモチーフを使う→単なる抽象絵画ではない
・「エスプリ・ヌーヴォー」の創刊→芸術とは、科学や哲学と同じく、表現に秩序を与える
・芸術や文学、あるいは科学や工業との融合をはかる

＜構成主義＞
・「精緻な合法則性」（技術的構造物の賛美）
・情報メディアに対する積極的姿勢
ＥＸ・エル・リシツキーのプロウン

＜ダダ＞
・従来の芸術作品概念の破壊と否定
・タイポグラフィーの改革

３、まとめ、および考察

バウハウスはその初期のアーツ・アンド・クラフツ的手工芸から、徐々に構成主義的産業デザインへとその教育方針の軸をシフトさせていった。そこにはデ・スティルやロシア構成主義の周辺諸国の芸術運動の影響が色濃く反映されているのはいうまでもない。また、それはかつてのドイツ工作連盟内での「機械化・規則化」を通した作業の合理化の推進と芸術的個性の重視という２大テーマをめぐっての内部対立の図式をそのままバウハウスが引き継いだ結果ともいえるだろう。

１９２３年バウハウス展でアム・ホルンの実験住宅（コンクリート建築の、団地型住宅）が展示されたときに、観覧客はゲーテの家（木造で伝統的な要素を含みかつ機能的である）の方を好んだと言われる。

相次ぐ戦争の中で、保守的になっていた市民にとってバウハウスの自由で、斬新な芸術は受け入れにくいものだったのかもしれない。しかし、別の視点から見れば、そうとも言えない。と、いうのはその展示会はバウハウスが自発的に実行したのではなく、チューリンゲン邦政府からこれまでの成果を展示するよう、要請されたという。又、国を動かし、世界を取ろうとしたヒトラーがこのバウハウスを潰したのは、絶対主義である彼にとって脅威になりえると思われたと同時に社会にも影響しうる存在と考えられたからなのではないだろうか。いつの時代も新しいものが社会全体に受け入れられるには時間がかかる。確かにその時代のバウハウスは市民には受け入れにくかったかもしれないが、ヒトラーや政府が認めたように、いつの時代でも芸術が及ぼす社会への影響もあり、芸術を求めない時代などないのではないだろうか。

参考文献

・『バイハウス―歴史と理念』利光功　美術出版社（１９８８）
・『デザインの２０世紀』柏木博　ＮＨＫブックス（１９９２）
・『バウハウスＨＯＭＥ特別編集Ｎｏ．３』エクスナレッジ（２００４）
・『マトリクスで読む２０世紀の空間デザイン』矢代眞弓、田所辰之助、浜崎良実　彰国社　（２００３）
・『バウハウスとその周辺＜１＞美術・デザイン・政治・教育　バウハウス叢書』利光功　中央公論美術出版（１９９６）